

不登校に関する金沢市内の主な相談機関

| | |
|--|---|
| 石川県教育センター (金沢市高尾町ウ31-1) TEL.298-3515 | 県内の幼児から高校生までの教育的諸問題について解決に援助・協力している。不登校児のために適応指導教室「ヒューマンセンター」を設置。 |
| 金沢市中央児童相談所 (金沢市本多町3-1-10) TEL.223-9553 | 18歳未満の児童に関する問題についての相談。一時保護や福祉施設への入所も。不登校児の適応をめざし、「グループ」をつくって指導。 |
| 石川県精神保健福祉センター (金沢市南新保町ル3-1) TEL.238-5761 | 幼児から老人まで広く心の問題に関する相談を医師や心理判定委員がおこなう。 |
| 国立療養所医王病院 (金沢市岩出町二の73) TEL.258-1180 | ネフローゼ、喘息等入院治療を中心にした病院。不登校など心理的な治療を要する相談・入院が増加。隣接して県立医王養護学校がある。 |
| 金沢市教育センター (金沢市武蔵町14-31) TEL.221-7949 | 不登校・いじめなど、市内の児童生徒の教育的諸問題への相談をおこなっている。不登校児のために適応指導教室「そだち」を設置。 |



県内適応指導教室一覧

| 教室名 | 教室のある施設名 | 所在地 | TEL |
|-----------|--------------|--------------|---------------|
| ヒューマンセンター | 石川県教育センター | 金沢市高尾町ウ31-1 | (076)298-5091 |
| ふれあい教室 | 小松教育相談室 | 小松市小馬出町91 | (0761)21-7958 |
| のぞみ | 加賀市青少年育成センター | 加賀市大聖寺東町2-3 | (07617)3-0117 |
| ふれあい教室 | 松任市教育センター | 松任市横町96-1 | (076)276-8420 |
| わかたけ | 七尾教育相談室 | 七尾市小島町チ3 | (0767)52-9110 |
| あゆみ | 輪島教育相談室 | 輪島市河井町6-21-5 | (0768)23-1172 |
| ステップ | 内灘町教育センター | 内灘町大清台140 | (076)286-1123 |
| やすらぎ教室 | 羽咋教育相談室 | 羽咋市吉崎町ラ1-2 | (0767)22-0345 |
| そだち | 金沢市教育センター | 金沢市武蔵町14-31 | (076)221-7949 |



心のふれあいをもとめて

不登校児童生徒の 理解とかがわり



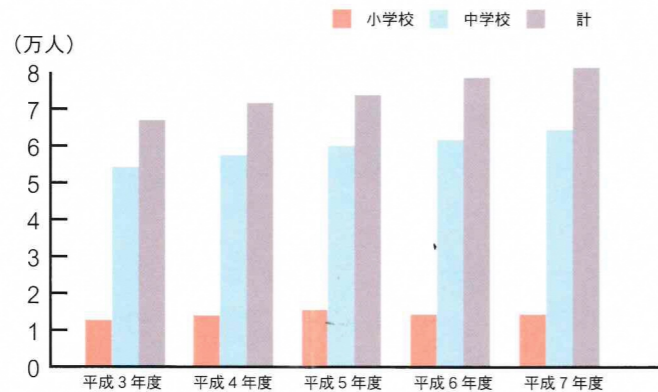
金沢市教育センター

1. 不登校児童生徒

1 不登校の現状は？

児童・生徒数の減少に反して、不登校の子どもたちは増加の一途をたどっています。

不登校児童生徒数の推移（30日以内）〈文部省調べ〉



もはや不登校は、特定の個人の枠を超えて、現代の子どもたち誰にでも起こりうる問題と言えます。そして、子どもたちの成長に関わるすべての人が、解決に向けて真剣に取り組まねばならない時期にきているのです。



不登校の原因は？

かつて、不登校がわずかだった頃、その原因として、**子ども自身の資質や、親子関係**が強調されました。その後、不登校の急増に伴い、**いじめ・体罰・学業不振等の学校生活**そのものも、重要な要因として取り上げられるようになってきました。

実際、**子ども自身の資質・親子関係・学校生活・社会構造**などの様々な要因が複雑に絡み合って不登校が引き起こされており、原因を特定することはきわめて困難な状況です。いじめなどの緊急性を要する場合を除いて、**無理な原因追及は、成果より弊害の方が大きい**と言えます。

例えば、不登校の原因を親の養育態度に帰着させ、強い指導をおこなっていくことが、解決への有効な手だてになるどころか、教師と親との信頼関係を損なう結果さえ招きかねないのです。

無理な原因追及を避け、不登校の子どもたちを取り巻くすべての人が連携を深めながら、しかもそれぞれの立場で地道な働きかけをおこなっていくことが、一見遠回りのようでも、解決への真の近道となるのです。

徒を理解するために

不登校の予後は？

日本の不登校の歴史も、はぼ40年になります。近年、不登校の子どもたちの予後（治療や援助によってその後どうなったか）について、多くの研究が報告されています。

多くの研究がほぼ一致して、**8割前後の子どもたちの予後が良好**と結論づけています。

例えば、国立小児科病院のグループは、1年以上不登校状態を継続した222例を対象に、予後調査（平均9年後）をおこなっています。結果は、予後良好なものとして189例（進学・登校しているもの165例、就職し社会生活を送っているもの24例）を確認しています。

多くの不登校は、特殊な子どもたちが陥る“**心の病気**”ではなく、誰にも起こりうる“**心の危機**”と言えるのです。

不登校のタイプは？

一口にタイプと言っても様々なものが考えられます。また、不登校の増加に伴い、タイプも多様化・複雑化しています。ここでは、不登校初期の心理・行動・身体の三側面から二つのタイプを素描してみます。

| | Aタイプ | Bタイプ |
|----|--|--|
| 心理 | <ul style="list-style-type: none"> 心理的な葛藤や不安があまりみられない。 几帳面、潔癖、神経質などの傾向がみられる。 | <ul style="list-style-type: none"> 心理的な葛藤や不安が強くみられる。 意欲のなさや、やや未熟な面が前面に表れやすい。 |
| 行動 | <ul style="list-style-type: none"> 家に引きこもり、対人接触を避ける傾向が強い。 | <ul style="list-style-type: none"> 外出することへの抵抗はそれほど強くない、友だちとの交流もある程度できる。 |
| 身体 | <ul style="list-style-type: none"> 頭痛・腹痛・発熱などの身体症状を訴えることが多い。 | <ul style="list-style-type: none"> 身体症状はあまりみられない。 |

一般に、Aタイプの子どもたちは、不登校以前、教師や友だちとの対人関係、授業、行事、部活動など学校生活に対してつながりや魅力を感じており、この学校生活が強いストレスにさらされることで不登校を引き起こすことが多いようです。

一方、Bタイプの子どもたちの多くは、もともと学校との接点がありません。不登校のきっかけとなるストレスがはっきりしない傾向が認められます。

2. 不登校児童生徒への関わり

指導・援助の目標

不登校の指導・援助には、**二つの大きな目標**があります。一つは、不登校の子どもたちの**“学校への復帰”**であり、もう一つは彼らの**“自立”**です。一般に、私たち教師は、子どもたちの学校復帰をめざして、指導・援助的関わりを始めますが、彼らの学校復帰が順調に進むことは少なく、むしろ、学校になかなか戻れない場合の方が多いとさえ言えます。

実は、学校復帰と自立という**二つの目標が一致しにくいところに、不登校の指導・援助の真の難しさがある**のです。

しかしながら、たとえ学校復帰が順調に進まなくても、保護者とともに子どもの自立を育んでいく姿勢や、子どもたちとの**人間的なつながりを通した地道な自立への援助**が、結果として、学校復帰に結びつく可能性を持つのです。

指導・援助の基本方針

現実には子どもたちのタイプによって、指導・援助の方針が異なる場合は少なくありません。ここでは「学校とのつながり(絆)の強弱」の視点から基本方針を述べてみましょう。

一般に、もともと学校とのつながり(絆)が強かった子どもたちの場合(一般にAタイプが多い)、登校できないことによる強い葛藤や緊張がみられます。そのため、心理的なエネルギーが枯渇した状態になりがちです。従って、できる限り登校刺激を避け十分に休憩の時間を与えます。すなわち、**エネルギーの補給を当面の基本方針**とすることが大切なのです。

他方、学校とのつながり(絆)が弱い子どもたちの場合(一般にBタイプが多い)、一見無気力に見えても、うちにエネルギーを秘めていると言えます。そこで方針としては、彼らと学校の接点を見つけ、それを彼らと一緒に育んでいくことが大切です。言い換えれば、彼らが**“学校生活のどこに魅力を感じているか”**を探し、彼らの学校魅力を築き上げることが肝要です。

学級担任の指導・援助

どのようなタイプであれ、学校に行けない(行かない)ことに対して、心の奥底で苦しみや挫折を感じていない子どもはいません。

このような子どもたちに対して、**担任がまず彼らの苦悩や挫折を受けとめ、共感的に理解することがもっとも大切なこと**です。担任との温かい人間関係を通して苦悩や挫折がいやされ、徐々に自立への意欲が生まれてくるのです。

すなわち、担任は“強い指導者”としてよりも、むしろ自立への**“温かい伴走者”**として彼らと接していく必要があるのです。

保護者・子どもへの対応

不登校の原因を探ろうとして、子どもや保護者に対し「なぜ」や「どうして」を繰り返すことがあります。しかし、不登校の原因は様々な要因が複合しており、多くの場合、無理な原因追及は実を結びません。

大切なことは、原因の追及よりも、**子どもや保護者との間に温かい人間関係を形成すること**にあります。

そのためには、教師の考えを押しつけるような“指導的な訓話”でなく、“子どもたちや保護者の気持ちに耳を傾ける対話”を心がけるようにしましょう。また、子どもたちや保護者の希望や意向を無視した訪問や連絡が、かえって逆効果となってしまうこともあります。子どもたちや保護者の気持ちに沿った十分な配慮が必要です。

クラスの子どもたちへの対応

例えば、いじめのようにクラスの中に不登校につながる大きな要因があれば、できるだけ早く対処すべきです。しかし、特に大きな要因が見あたらない場合、焦らずじっくりと**クラスを見直し、よりよい学級づくりを継続**していく必要があります。

よくクラスの友だちを呼びに行かせる方法をとる場合があります。その時、単に先生の命令で行くのならば、訪問がマイナスに作用する危険性があります。その友だちと不登校の子どもたちとの間に十分な人間関係があり、かつ、彼らとの関わりを積極的に持とうとする意欲があるならば、友だちの訪問は成果を生み出す可能性を持つでしょう。

学年や専門機関との連携

不登校は長期にわたることが多く、時がたつにつれ、担任と保護者や子どもとの関係が徐々に薄れてしまいがちです。また、専門機関と連携する場合も、相互理解に基づく“連携”が、いつのまにか預けっぱなしの“委託”にすり変わってしまうことも少なくありません。

このような点を防ぐためにも、**適宜、管理職、学年の職員、生徒指導・教育相談担当者、養護教諭と理解や対応について話し合っておく**必要があります。もし、不登校の子どもたちが学校への復帰を望んだとき、全職員による彼らへの理解が、その成否に大きく関わると言っても過言ではありません。



▶ 初期の対応 ▶

不登校の始まりとしては、次のような様子が見られます。

不登校のサイン

1. 月曜などの休み明けや、特定の教科のある日に欠席が多い。また、遅刻や早退が増える。
2. 欠席理由は、風邪・発熱・頭痛とされているが、ずるずると長引いたり、繰り返したりして、欠席日数が多くなる。
3. 体の不調を訴え、体育の見学や保健室へ行くことが多くなる。
4. 元気がなく、昼食時間や休み時間に一人であることが多くなる。
5. 部活動や委員会活動の欠席が増えたり、やめたがる。
6. 授業中に集中力がなくなり、成績が急に下がることもある。

上記のような様子が見られる時、不登校の前兆であることが多く、以下のような点を中心に注意深く検討を加えます。

1. 友人関係
2. 教師との関係
3. クラスでの様子
4. いじめや体罰などの事件
5. 学業成績
6. 性格・能力
7. 家庭生活
8. 部活動などの課外活動
9. 過去の出席状況

このような情報に基づいて、指導・援助の方法を検討します。いじめのようにはっきりした要因が認められる場合、学年で話し合い共通理解のもと適切な対応を早急にすることが重要です。もちろん、その対応の背後に、保護者や子ども自身との温かな人間的関係を築き上げる努力が必要なのは言うまでもありません。



適応指導教室「そだち」の援助

金沢市教育センターでは、不登校の子どもたちの集団適応、生活、学習援助をおこなう教室、「そだち」を開設しています。

「そだち」では、家庭に引きこもりがちな不登校の子どもたちを中心に、以下の視点で援助をおこなっています。

1、安全で自由な居場所づくり

登校できないことに罪悪感を抱き、家の中に引きこもって不安な日々を送っている子どもたちに、安全で自由な居場所を提供することが「そだち」の最大の目的です。

子どもたちは、安全で自由な場が与えられることによって、生きる希望や意欲が回復してくるのです。

2、希望や意欲の実現への個別援助

子どもたちの心に希望や意欲が再び生まれてきた時、具体的かつ個別的な援助をおこないます。学習意欲の生まれた子どもたちには各自のペースに合わせた個別援助をしたり、心の奥深くにある悩みを語る子どもたちには、そっと耳を傾けます。

このような援助を通して、閉ざされていた心が徐々に外に向かって開かれていくのです。

3、小集団での交流や活動

関心が外に向かうにつれて、同世代との関係を求めるようになってきます。その時、小集団での交流や活動が意味を持つようになります。

小集団での学習や遊びや話し合い、また様々な行事を通して、彼らは本来の明るい姿を取り戻すようになるのです。

4、保護者や学校への援助

わが子が不登校になることによる保護者の悩みや苦しみは、決して小さいものではありません。そこで、保護者の方との定期的なカウンセリングを通して、子どもへの理解を深めていきます。このカウンセリングを通して、保護者の方も子どもたち同様、大きく成長していくのです。

また、学校とも適宜連絡を取り、子どもたちへの援助のあり方をともに模索していきます。このことを通して教師の不登校への理解も進んでいきます。

詳細につきましては、教育センター（221-7949）へ、直接お問い合わせ下さい。